Osaka University Knowledge Archive

Title	Modernization in the Shakuhachi Art World
Author(s)	Joshua, M. Smith
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/57704
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【21】

氏　　名	Joshua M. Smith（ジョシュア スミス）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学　位　記　番　号	第　２３５１１　号
学位授与年月日	平成22年３月23日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学　位　論　文　名	Modernization in the Shakuhachi Art World （尺八芸術世界における近代化）
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　スコット・ノース （副査） 教　授　牟田　和恵　　准教授　辻　　大介

論文内容の要旨

This dissertation focuses on the shakuhachi, the traditional bamboo flute that i closely identified with Japanese culture. One purpose of this paper was to investigate process of modernization in the shakuhachi art world. Another aim was to find out how occurred in the past and how it occurs now. Finally, whether the shakuhachi is conside religion, or tradition is examined in the study.

The sociological foundation of this paper is Pierre Bourdieu's concepts of capita and field, and Howard Becker's notions of artists categories and an art world, as a guic exploring change. Qualitative methods of gathering data, such as participant observati interviews, form the basis of this study. When researching the historical chapters, a th investigation of Japanese historical texts was undertaken. Quantitative analysis also i employed in the forms of surveys regarding sources of economic capital and a content a the shakuhachi sales market.

It was found that change has taken place over the years through various forces: forces such religious changes, and external pressures including governmental control a economic realities. As society and the state have changed, so has this art world. With modernization came the pluralization and individualization, leading to the emergence shakuhachi schools which each develop and maintain their values in different ways. Th investigation reveals that schools and their players developed different ways of obtaini and authenticity, so that now more than ever, there is a tension between tradition and modernity. The results also indicate that there was no single, clear dominant theory be Bourdieu and Becker for investigating this art world. A combination of their strong poi well as the researcher's own additions better helps navigate the history of how this wo changed and how it may develop in the near future.

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本の伝統的な楽器尺八とその文化的世界の近代化過程を、文化社会学的・歴史社会学的分析の方法を用いて検討するものである。邦楽の一種、尺八の歴史は長いが、これまでの尺八研究のほとんどは、音楽そのものが中心であり、社会的環境を配慮した研究が少なかった。そのため、尺八とそれを巡る世界を社会的に構築されている現象としてとらえる本論文はoriginalityが高いと評価することができる。

尺八とその文化的世界の伝統を継続・変容させる人々を分析するため、本論文では、Howard BeckerのArt Worlds理論とPierre Bordieuの社会的フィールド論が用いられている。とくに、Beckerの概念を用いて社会的ネットワークにおけるartistの創造性を構成する要因を明らかにし、Bordieuからは、artistの音楽フィールドにおける位置によって、文化的・社会的資本の格差とその関連する価値観やartist自身のアイデンティティを解明している。

本論文は、13章の構成で、尺八を吹く人間の世界が、その発生から現在までどう変化して来たのかを明らかにしている。歴史的には、尺八は、宗教、特に禅宗との関連が深いと言われているが、古い時代においては、禅宗よりも空海によって代表される真言宗との関係の方が正しいのではないかと論じられている。

そして、その後の時代の、尺八文化を担う僧侶たちの生活習慣の変化、江戸幕府の関連と役割、幕末の後の流派の結成、そして近代における尺八演奏者の多様化とグローバル化現象との関連が描かれている。

論文の後半においては、近年の尺八世界における文化的資本の成立や規範の変更と発展が論じられる。若者や女性、外国人演奏者の活動の意義、ハリウッド映画やCDの音楽として展開していく、文化・芸術の側面ではなく消費されるものとしての尺八音楽について記述され、宗教の道具から商売の道具へ、尺八も、戦後の急速に変化する環境のなかで変わり、演奏者のコミュニティにも大きな変化が見られる。つまり、産業化のなかで伝統芸はどう生き残るのかが課題となっている。経済の原理で動く現代において、CDを売る、コンサートを計画し実行する、尺八を学ぶ生徒を獲得する必要などがあり、従来の宗教的集団からエンターテインメント・ビジネスへの展開のなかで、尺八家のアイデンティティが僧侶や幕府のスパイから音楽家へと移り変わっている。

しかし、このように尺八の世界には、変化がある一方で、伝統も根強く残っている。尺八の流派、家元の“establishment”から認定を得るためには、伝統を重んじる必要があり、決まった「本局」と呼ばれる歌を決まったやり方で演奏することしか認められていない。つまり、昔の規範の権力が今も支配的であると言えるのである。しかし、生活していくために現実的な経済的状況にも目を配らなければならず、この複雑な事情にはさまれている演奏者を、理論的に理解するためにBeckerのart worlds理論を再編しようと試みられている。

申請者は、自らが尺八を習い、演奏者になりながら名人級の尺八の先生とその世界の現実を、インタビューや参与観察の手法を用いて研究した。普化宗と呼ばれる宗派の僧侶のように、一人旅で四国などのpilgrimage（行脚）に出かけ、名人級の尺八家の集まりなどを観察し、bottom-upからのエスノグラフィーと歴史的文献研究とを組み合わせて尺八の世界を多面的に分析している点が評価できる。

以上のことから、本論文は博士（人間科学）の学位にふさわしいものと判定する。